

丸亀市立城坤幼稚園（香川県）

「おもしろそう。これなんだろう?」小さな発見から心が動き出し、思考へとつながるプロセスの中で、子どもたちの「科学する心」が育まれていきます。子どもの日常は、発見や驚き、好奇心に満ち溢れています。不思議だな、面白いな、と光に魅了されアプローチした実践、自然と共生し、空間的認知を広げていった実践など、子どもたちの体験を通した思考の深まりを、保育者が丁寧に捉えて記録に残し、「科学する心」を育んでいます。

「ひかりがほしい！」（3歳児／12月）



絵を描くことが好きなリン。廃材を使ってネコや電車を作る過程で、紙だけでなくいろいろな紙素材にペンで絵を描く。「これも描いてみたい」と、ゼリーカップやイチゴパックなど透明のつるつるした廃材を手に描き出す。しかし、カップに色はつかず、油性ペンで描いてみることにした。「色がついた!」と喜ぶリン。この日は冬の日差しが部屋の中へ入っていて、偶然手に持っている透明カップに描いた絵が、床に映っていることに気付いた。

リン「あっ、みて!」と必死で周りの人に伝えながらも目を床から離さない。手に持った透明カップを床に近づけて、映る絵を見たり、手を動かしたりしている。「みて、動くよ」と不思議そうにつぶやき、「おっきくなった!」と手を動かす。映る絵の大きさが変化することに驚いている。



午後「テレビのやつやりたい!（床に映る絵）」と、リンがもう一度試す。しかし、午前中のように、なかなか絵は床に映らなかった。リン「ひかりがほしい!」。そこで、懐中電灯で試すことになった。リンは透明カップに懐中電灯の光を当てるが、思うように光は当たらない。「じゃあ、こっちでしてみよう」とテラスやロッカーの上など、様々な場所に懐中電灯の光を当ててみる。

翌日、手の届く場所に懐中電灯はあったが、リンは懐中電灯を手にはせず、太陽の光を使って絵を映すことを楽しんでいた。

「ねえ！この色めっちゃ光る！」（5歳児／7月）



先生に聞いてみました

毎日、子どもたちの遊びこむ姿（つぶやき・表情等）や心の動き、保育者の関わりやその時の気持ちを保育の振り返りとして15分程度で書いていて、それがすでにエピソード＝実践になっています。写真や動画を見て思い起こすこともあります。例えば、Aちゃんの遊びを映していたものを改めて見返すと、客観的な見方や考え方ができ自分の見方や視点に変化が生まれたり、その時に見えていなかったことに新たに気付いたり、その周りにいる子どもに目が向いたり、友達とのつながりが見えてきたりもします。“論文”というと「そんな大それたこと…」と思ってしまいますが、日々の実践の積み重ねを“一つの形”として表したものの、子どもの豊かな心や創造力を育むために自分たちの保育を捉え直す機会、と考えています。子どもたちの好奇心・探求心はすぐに表れるものもあれば、ため込んでいく中で表れるものもあります。子ども一人一人が好奇心・探求心をもって遊びに向かって

夏祭りごっこの看板を作っていたナオとヒナ。半分だけ水が入ったペットボトルを眺め「光る看板を作りたい」とライトを照らす。今まで作った色水にもライトをあてて「これはどうかな？」と試していた。

数日後、ミサが色水にライトをあてて見比べる。いつもは物静かなミサが、「ねえ！この色めっちゃ光る！」と興奮気味に友達に伝えた。

その色水は、石鹼の泡とおろし器で削ったミカンの皮が入っていて、白濁色にオレンジ色の粒が混ざったような色だった。

ミサは、「この色が一番光ってると思う」と言う。いろいろな色水を真っ暗な場所でライトを当てて試すと、予想はミサの予想通りだった。濁っているのに一番明るい。

子どもたちは、新たな不思議さや面白さを感じているようだった。

いく日々の中、私たちは論文を通して考えが深まったり、共有することの大切さに気付いたり、子どもの興味や関心、好奇心や探求心にアンテナを張り、自分の声掛け、一人一人のその瞬間の表情や言動などを意識するようになりました。また、課題にも気付きます。例えば、環境づくりは一人ではできません。優秀園としておこなった研究発表会では、園庭環境に視点を絞ってみました。参会の先生方がワイワイ語り合いながら、子どもの好奇心や探求心が育まれる夢の園庭を描いたり、センス・オブ・ワンダーが子どもの豊かな心の育ちにつながっていることを知ったりし、いろいろな分野から子どもの「科学する心」を考えていく機会となりました。子どもたちの健やかな成長を願いながら、いつも“好奇心や探求心＝科学する心”をもち、子どもと共にある保育者でいたいと思っています。

↓ 論文全文はこちら



つながる めぐる ふかまる

～好奇心・探求心の芽生え
心の中で友達と一緒に
自然と共生しながら～

